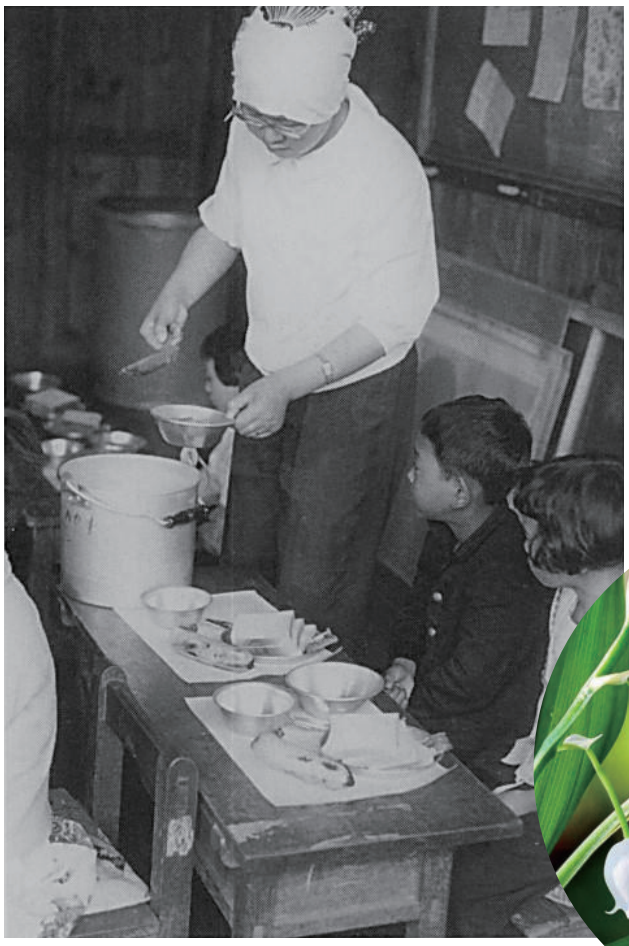
次号特集予告

# 「すずらん給食」

# 温故知新

過去に起こった出来事や教えをよく調べて学び、そこから新たな知識を得る



ライオンズクラブ ( 以下 LC) が日本に根付いて約 70 年。先輩ライオン達が創成期に手探りで様々なアクティビティを展開して紆余曲折の結果、地域社会へインパクトを与え、ついには国の制度をも 変革するきっかけを作ったアクティビティがあります。
「すずらん給食」は、約 60 年経過して今でも語り草となっているアクティビティ。
なぜ LC がこの課題と出会い、マスコミが取り上げ、政府を動かして解決へ向け動きだしたかを深堀してみたいと思っています。
また、現在も社会に必要とされ継続されているアクティビティを取材して、過去に起こった事柄から新な知識を得て未来を切り開き、地域社会にインパクトのある LC 活動と発展を探ってみたと思います。特集は次号の掲載予定です。
参考資料 1『すずらん給食物語 私のジャーナリスト作法』

記事担当：L 赤尾嘉晃、L 坪坂有純

# 温故知新

# 第一回「すずらん給食」の時代背景

## 全国の欠食児童を救った「すずらん給食」アクティビティ

## 岩手県・盛岡ライオンズクラブから全国へと広がった完全給食実施

### 「すずらん給食」とは

今から59年前、東京オリンピックの翌年、1965年(昭和40年)に「すずらん給食」と呼ばれる奉仕活動が岩手県で生まれました。岩手県・藪川の子どもたちに完全給食（※1）を提供するために、盛岡ライオンズクラブ（以下LC）を中心に始まった活動のことです。この活動により、辺地の実態がマスコミ（最初は主に毎日新聞）報道され、当時の首相佐藤栄作を動かし、辺地校の給食施策が著しく改善されていきました。

盛岡LCから始まったこの活動は、日本国民の心に響き、政府をも動かし、全額国庫予算による全国の辺地校での給食提供へとつながります。

### 岩手県・藪川の「へき地4級」（※2）の併設校の存在

1964年頃の岩手県・藪川には、へき地度が上から2番目に高い「へき地4級」の併設校がありました。この併設校は、盛岡駅から距離にして約50km（品川から茅ヶ崎の距離）、路線バスに2時間揺られた終点バス停から更に2時間歩いた先。冬には、深さ1mを超す大雪に県道は埋まり、交通は完全にストップします。へき地の多い岩手県でも特にひどいへき地だと言われていました。そんな併設校がある藪川は、谷間が少し開け、盆地状になったところに十数個の農家の集落がありました。

標高900mのこの寒冷地で米はあまり育たず水田はほとんどありませんでした。人々はヒエやアワを主食にするしかなかったそうです。カロリーが少ないヒエ飯を食べていては、重労働の農作業が満足にできるわけもありません。これらの主食事情から家族全員が三食食べることができず、バランスの良い食事をとれていなかった厳しい状況が終戦から20年以上経過しても続いていたようです。

1960年代半ばの岩手県藪川小・中学校

### 2人に1人は弁当なしのへき地校の実態

1964年当時の藪川の学校は本校と分校が2校ありました。へき地4級の本校には小・中学生が合計180人、へき地3級の分校1校は小・中学生合計70人、へき地4級の分校1校は小学生9人が在籍していました。児童の食生活は、1963年から政府の補助で脱脂粉乳によるミルク給食が無料で始まりましたが、約1年で打ち切り。その後、村の教育委員会は費用がない中、村費補助で週3日ミルク給食（※1）、週2日は材料を持ち寄ってのミソ汁給食（※1）を実施していました。

保護者、兄弟姉妹の大部分は食べるだけで精一杯、現金収入の少ない農家で、給食費を負担することができず、弁当のない児童が毎年増加していました。弁当の無い児童は、アルマイトのボウルに入っ

た脱脂粉乳のミルク一杯だけが昼食の日もありました。農閑期などには、全校の半分以上の生徒が弁当無しの状態が続き、中には数日間食事をとることができず、腹痛を訴える児童・生徒もいました。当時、へき地三校で栄養調査を行ったところ、本校で３４人、両分校では２０人、合計５４人の欠食児がいました。町の学校（完全給食実施校）では普通一番楽しい時である昼食の時間が、へき地校では子どもたちの表情は暗く沈み、話し声も聞こえない光景が広がっていました。

## 改善されない給食実態

本校の校長はこのような給食事情を改善すべく、「完全給食で欠食児を救おう」と村教育委員会に交渉しましたが、予算難で対応してもらうことができませんでした。この時予算は、道路の整備などを中心に使われていました。都市部や、東京都との生活格差が少ない岩手県内の県都（盛岡市街地）では、へき地の現状、欠食児がいる事実があまり知られていませんでした。しかし、実際には岩手県だけはなく全国の辺地校の生徒数１４万人が、日々必要な栄養を得ることが出来ず苦しんでいたのです。第一回の「すすらん給食」の時代背景はここまでです。

**●参考コラム**

※1) 給食には、1 完全給食 ( パンまたは米飯、ミルク、おかずの三品 )、2 捕食給食 ( ミルク、おかずの二品 )、3 ミルク・味噌汁給食 ( ミルクか味噌汁 の一品 ) の 3 分類されていた。

※2) へき地 ( 辺地 ): 公立学校の教職員に対する「へき地手当」の額を定めるための等級。数字が大きいほど都会から離れている

**●参考文献**

すすらん給食物語 前野和久・著 砂書房　1994 年 3 月 17 日 第 1 版第 1 刷発行

## 当時のへき地と都心部・県中心部の学校給食を比べてみましょう。

**◀へき地の給食**

1963 年 ~ 脱脂粉乳によるミルク給食 ( 脱脂粉乳のみ )

1964 年　週 3 日 脱脂粉乳。

週 2 日持ち寄りによるミソ汁 ( 具材は山でとれた フキやワラビ )。

**都心部・県中心部の給食▶**

1952 年 4 月から、全国すべての小学校を対象に完全給食が開始しました。

コッペパン、ミルク ( 脱脂粉乳 )、鯨肉の竜田揚、せん切りキャベツ、ジャム

1964 年揚げパン、ミルク ( 脱脂粉乳または混合乳 )、おでん 揚げパンなどの調理したパンが給食で使われるようになりました。

担当 : L 坪坂有純 ( 東京新宿 LC 所属 )　L 赤尾嘉晃 ( 東京豊新 LC 所属 )

# 次回予告

次号第 2 回では、この状況を知り、盛岡 LC がどのようにかかわり、行動を起こしたか。また、なぜ「すずらん給食」と呼ばれるようになったか、そして日本全国に運動が広がり、政府を動かすことにつながったかを記していきます。

なお、本アクティビティを実施した盛岡 LC( 今期幹事：浅沼克人 L) に取材を申し入れたところ快く対応してくださり、きっかけを作ったといわれている「故中村七三 L」からその当時の話を聞いている「伊藤英明 L」へのインタビュ ーを実施予定です。第二回以降にその内容を掲載いたします。「すずらん給食」実施への過程、地元地域での評判、その後の奨学金制度整備への展開などをお聞きする予定です。ご期待ください。

# 温故知新

## 第二回

# すずらん給食 実施、盛岡から全国の欠食児童ゼロへ

### 卓越したリーダーシップと東京・横浜地区クラブの協力、マスコミの力

日本のライオンズクラブ（以下ＬＣ）で語り草になっている「すずらん給食 アクティビティ」が、どのようにして成し遂げられたのかを書物やネット情報 に加え、発祥の地、盛岡 ＬＣ の協力を得て現地取材を実施しました。

１月２６日盛岡ＬＣ事務局にて、**レジェンドメンバーの伊藤英明Ｌ**
**３３２-Ｂ地区 宮田謙 元ガバナー**
**今期幹事の浅沼克人Ｌ**
の３名にお話を伺いました。

## キーパーソンの存在と LC 仲間の連携

**中村七三 L**
**前野和久氏（毎日新聞記者）**
**県保健体育課給食係長 香森七蔵氏**
**薮川小学中学校 宮 五郎 校長と**
**盛岡 LC メンバー**
**首都圏のブラザークラブが連携しました。**

現地取材インタビュー　L 赤尾嘉晃 ( 東京豊新 LC 所属 )

本アクティビティの提唱者の一人、**中村七三Ｌ**は江戸時代からの名家の出身（父は岩手銀行の創立者）、ビジネスでも成功され趣味の薔薇の品評会においても、米国ＮＹの世界大会で新種の花が優勝するという経験をお持ちの方でした。

長年、青少年健全育成に携わり、１９６３年１２月にへき地薮川小・中校の**宮五郎校長**と懇談し、欠食児童の存在を聴き、ＬＣで現地調査を行いました。

１９６５年３月岩手県庁、教育委員会での出会いが事を動かすことになります。中村Ｌは県内高校の授業料引き上げについて打ち合わせに行かれ、取材に来ていた毎日新聞社の記者**前野和久氏**（薔薇栽培で取材を受けた）と再会し、薮川地区の欠食児童の現状を話されました。「もはや戦後ではない」と宣言されて１０年が経過した時期に欠食児童がいると聞き、事実を確かめるために翌日即、前野記者、香森七蔵氏、岩手放送の記者が取材に出かける事になったのです。

東洋のチベットといわれる岩手県の高地薮川地区。本州で最も寒く米は育たず、アワとヒエが主食の地域。そこにある薮川小・中学校の宮五郎校長と児童生徒に会いヒヤリングを開始。給食は週３回の脱脂粉乳のみ、お弁当を持ってこられている児童生徒は５人に２人の割合でした。お腹が空いて、腹痛を起こす子どもが多くいて、身体は痩せて全国平均値より小さいながらも皆昼ごはん以外は、児童生徒は皆、楽しく授業を受け明るく振舞っていました。

今期幹事の浅沼克人L

レジェンドメンバー 伊藤英明L

332-B地区 宮田謙 元ガバナー

## 毎日新聞社 社説掲載

戦後20年も経過して欠食児童生徒の存在とへき地の給食事情を初めて取材した前野記者は衝撃を受けて即記事を書いたそうです。記事は盛岡支局内でスクープと位置づけられ夜汽車で本社へ送り、1965年6月に毎日新聞全国版の社説に掲載されました。その記事が時の佐藤栄作首相の目に留まったのです。

## 盛岡LCのアクティビティの考え方

盛岡LC内では、給食アクティビティ導入に対して長期に渡り支援可能かが、争点となり慎重な意見もあったそうです。クラブ内に「さかなを贈るなら、釣り竿の使い方を教える」というドネーション先へ「真の励ましと希望、自立を促す」基本的な考えがあり、そこで高地ならではの「すずらんの花を児童生徒が自ら摘んで」それらを盛岡LCメンバーが地元企業へ連携を呼びかけ迅速に輸送し、設立当時から交流のあった首都圏のブラザークラブに購入してもらう理想的な双方向のアクティビティが生まれたのです。

県内のへき地へ、他の方（へき地をよく知る農林省の神奈川県出身の役人）からも支援があり楽器を贈られ鼓笛隊が結成され、盛岡市内の学校と肩を並べる演奏ができるようになり、地域の歌も作詞・作曲され歌われたそうです。

## すずらん給食後の展開と発展

社説に掲載後、全国の欠食児童調査が行われ、国の緊急予算が組まれ完全実施へ動き出しました。次年度にはへき地給食給付費用が予算化され全国約14万人の子ども達がパンとミルクの学校給食を食べられるように広がりました。全国から大きな反響もあり、多くの寄付が岩手へ届けられました。一方、地元では全国へ県内の「恥」を大きく報じられたことで反発もあり、地元周辺地域からの寄付は大変少なかったそうです。情報発信する場合にリーダーが何を優先するかを決め、発信後に様々な意見が寄せられることを予想し、対応策を準備していることが大切と感じました。

その後、「すずらん給食がきっかけ」となり、へき地の中学生が高校へ進学できるように県内で「高校奨学金・岩手育英会」が発足されました。LCの青少年育成事業発展が地域の教育制度改革まで到達したことは大きな意義があった思われます。

盛岡LCは、その後も様々なアクティビティを展開しています。青少年育成を中心に各種スポーツ大会を開催し、No・1決定以外にスポーツ好きが参加し活躍できる大会を設け、子ども達の広がる夢の実現の一端を担い続けています。結びに、これからのアクティビティを伺ったところ、「すずらん給食」の成功があまりにも偉大で、それを超える事業を現在の多様な価値観がある地域で見出し、すべての人に役に立つことがなかなか難しく、交通網が整備され「都市化した市民の課題」へ挑戦していくとお話しされていました。

## 約60年前のアクティビティを取材して

同じテーマ・課題を解決したい仲間を増やしたことが、成功の一つの要因と思いました。また、児童生徒も自ら「すずらんの花」を摘みバス、鉄道で輸送し、一方通行のアクティビティでない点が社会の共感を呼んだと感じました。

令和の時代になって、地域社会には多様な考え方、課題があり、テーマを絞って奉仕活動をするのが困難となっています。そのような中でもLCメンバーが行政や地域団体と今以上に交流を密にしてアンテナを高くしていると、地域の課題を見出し易くなり、我々LCでしかできない奉仕を必要としている方々へ「希望の光」をあてられる機会が増えていくのではないでしょうか。

温故知新

# Beacon of Hope 第三回 最終回

# 希望の光を届けて行こう

**330-A 地区は、キャビネットと各クラブが協力して毎年、広域的なアクティビティを実施して参りました。地区ニュースでデジタル情報が残っている2011年から 2023年の代表的なアクティビティを一覧にまとめました。東日本大震災以降の13期を振り 返り、その中から効果的な運動、情報発信、地域団体・行政との連携など、令和時代に即した展開を考察してみたいと思います。**
**( ライオンズクラブ =LC と表記 )**

東日本大震災後の数年は、「被災者への心の復興支援」が中心で現地でのコンサート や東京地区でのチャリティーコンサート、女川秋刀魚収獲祭などが開催されました。来場者のアンケートには「久しぶりにワクワクしながらお出かけできました」「演奏に 応援され、明日から一歩前に進みます」など前向きなコメントが多く、ニーズに合った事業が展開されたと感じました。
その後、薬物乱用防止運動、環境フォーラム、共生社会を目指すバリアフリー運動会、表参道原宿で 80 万人へ LC の PR と続き、コロナ禍の環境でも、リモートでのアクティビティコンペを開催して全国 LC との交流の 工夫がなされました。地震災害については、「減災」という考え方が提案され、都社会福祉協議会との連携へと具体的な成果がでました。また、ラジオ番組とテレビ・ラジオ CM へも挑戦し、マスコミ関係者は継続することで本当の効果が上がると最近ある フォーラムでコメントしています。格差社会にも希望の光をあて、貧困の子ども達へ食堂のコミュニティから教育、就職の機会作りの橋渡し運動を開始しました。今後の展開に注目してまいります。
これらの広域アクティビティの変遷を踏まえ、地域に根差したクラブが単独ではなく、地元団体や行政と各々の得意分野を活かして協力し合いアクティビティを企画運営していくことが大切と思われます。また、誰もがスマホ(情報端末)を持つ時代に「地域のオトナ達」へ「LC・地元団体・行政」から情報が届き得られる、マスメディアとも協力して情報発信の仕組み作りを行う時期が到来したと考えられます。
結びに、各種アクティビティ開催時、必ず来場者へアンケートを行い集計して、「来場者は何を感じ、持ち帰ったのか」「今後のニーズは何か」を調査分析して、新たな運動に生かすことが最も重要と考えます。高齢社会、人口の都市集中と多様な価値観の中、運動のテーマの絞り込は困難な状況です。ただ私たち LC の放つ「希望の光」を 待ってる人々がいます。また一緒に活動したいと思っている、声を掛けられるのを待っている仲間もいます。
一致団結！チームワーク良ければすべてを解決できると信じています。　**We Serve!**